

1. 概要

2011年3月の震災から3年経過した。震災以来毎年訪問しているが、今年も福島を訪れた。今回は原発の影響でまだ震災の処置がままならず、その傷跡が生々しい浪江町を特別に視察させて頂いた。また昨年訪問した広野町西レストラン、いわき久之浜浜風仮設商店街、道の駅そうま中澤水産の方々に復興状況を聞かせて頂いた。

今回我々総勢22名の方達が関心を持ってこの福島の地を訪れた。

日時：平成26年3月15日（土）～16日（日）

場所：福島県広野町、いわき市、福島市、浪江町、相馬市他

参加者：DNO関連 橋本、皆川、黒木、開田、坂手、佐藤、藤田、赤井、桑井、内田（記）

カギピース関連 三井、與川、米山、海法、熊野、黒澤

武蔵野美術大学関連 成瀬、小川、榎田、木村、鈴木

特別参加 菅野（敬称略）

お世話になった方：矢吹氏、伊東さん、嶋原課長、赤石係長、村上氏（運転手さん）

訪問先の方：西さん、プラネット佐藤さん、青木親子、小澤さん、渡辺副町長、中澤社長 他

参考資料

- ①2014福島訪問企画
- ②2014DNO福島訪問支援ツアー企画
- ③集合場所と部屋割
- ④2014福島訪問収支決算書
- ⑤福島訪問ツアー参加者名簿
- ⑥別添1) あおき農園紹介記事
- ⑦別添2) 雑誌「道」に掲載された小澤氏の記事

2. 訪問先

- 1) 広野町 アルパインローズ 西レストラン



西さん：昨年まではこのレストランを訪れる人は工事関係者がほとんどで赤字でありましたが、ソフトゴルフ施設も完備した為、地元の方に少しずつ来て頂けるようになりました。僭越ですが、この高台に明かりを灯しつつける事が自分の使命であると感じておりました。ここに来てやっと少し落ち着いたかと思っております。個人的にはワールドカップが始まり、6月にブラジルへ選手たちと同行し食事を作りに行く事となっております。

2) いわき久之浜 浜風商店街



いわき久之浜は3.11の津波により全てが無くなりました。半年後、浜で操業していた佐藤さんは小学校の運動場の一部でこの浜風仮設商店街を開設しました。



昨年に続き今年も訪問させて頂き襲ってきた津波が信じられないほど奥まで浸水してきたオプジェの説明に一同声も出ませんでした。しかし今はから元気だとおっしゃっていましたが、皆さん仲良く元気に暮らしていらっしゃいました。

3) 福島青少年会館 交流会

i) 青木農園 青木さん



青木さんはきゅうり農家2代目との事、3代目の息子さんにも出席して頂きました。

3.11発生によりきゅうりは全滅で更にいわゆる風評被害で一時は目の前が真っ暗になったそうです。時に声を詰まらせてお話になり、その苛酷な体験を少し垣間見る事が出来たような気が致しました。

ii) 小澤さん 桑折駅前仮設住宅自治会長

小澤さんは浪江町の住民で3.11震災により飯坂温泉近くの桑折仮設住宅に避難して来られました。浪江町民は現在も全住民が避難しており、その実態を雑誌などで被災地の状況を精力的に伝えていらっしゃいます。浪江町は地震、津波それに原発の3つの災害に見舞われ今も3年前の状況がそのまま時間が止まったかのごとく無残な姿を残しているとおっしゃっていらっしゃいました。



4) 懇親会

懇親会には菅野さん、青木さん親子も参加され盛大な会合となりました。冒頭、青木祐治さんがあおき農園を正式に3代目として継いでゆく事をみんなの前で宣言されました。お父さまの久治さんは始めて息子さんから決意を聞かれたそうです。これには一同感動でありました。



交流会の途中、福島市役所の嶋原課長さんと赤石係長さんに寄付金とお酒を持参して頂きました。まことにありがとうございました。

5) 出発

翌朝浪江町役場から伊藤さん、NPOふるさとネットワーク福島から矢吹さんが参加されました。



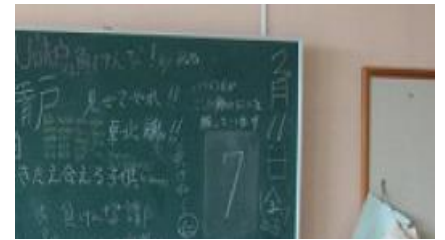
6) 浪江町

浪江町は3.11以降放射線量が多いとされ、瓦礫の撤去もままならない状況であった。

3年経過した今も、時折時間の経過を忘れさせる光景があちらこちらに見うけられた。

置き去りにされた船、3月11日で止まっている黒板、次の日が卒業式の講堂、それでもまじかに存在する福島原発。

これらの風景を言葉にできる能力はないが、ただその災害の大きさに圧倒され衝撃を受けた。



渡辺副町長さんの話では首都圏の方々に来てもらい、現状を理解しこの状況を皆さんに伝えて頂き、更に浪江を（忘れて）風化しないで欲しいと切に訴えられていた。

また、浪江町に帰りたいと希望している若者は約 2 割に過ぎないという事に対し、哀しみを抱きつつも仕方がない現実と受け止められているとの事であった。一人でも帰りたいと希望する方あれば我々はその為に力を注ぐとの事であった。



7) 道の駅そうま

昨年訪問させて頂いた中澤さんの案内で松川地区の被災状況を視察した。三保の松原と並ぶ松林ということであったが一本の木を残して壊滅状態であった。地元レストランの‘たこ八’がこの春に震災を乗り越えてオープンし、そこで頂いた海鮮はとても美味であった。

3. 会計報告

別途実施。

会費 DNO関連 15,000 円 30 歳以下 10,000 円

4. 感想

帰路バスの中でみなさんの感想をお聞きした。要約を記します。（順不同）

熊野：自分は何事に対しても第 3 者感がぬぐえず、今回もそのように感じた。福島の問題は避ける事ができれば避けたいけれどそれを許すことが出来ない自分があるので、それならば意識を向けようと思った。何事にも心が動かないほうであるが、今回は少しグッと来た。

三井：福島原発を観光地化すれば良いのではないかと思った。それにより一人でも多くの人に来てもらい、現状を認識し、風化しないように関心を持ってもらう事をすれば良いのではないかと思った。

榎田：ここにいるみんなと知り合えて良かった。このツアーを教育的な観点からみれば、やはり請戸小学校の惨状をみんなに理解して貰う事が大切ではないかと思った。あその場所には

大変刺激を受けた。ツアーに参加させて頂いて良かった。ありがとうございました。

木村：何の準備もなく参加させて頂いたので、主体的に行動していない自分が居た。福島について興味をもつには知識が足りなかった。石巻や福島を訪問し自立した行動に出るきっかけとしたい。福島のご飯は美味しかった。心に残った言葉は‘一人でも帰りたい人がいれば、我々は頑張る’と言う言葉であった。ありがとうございました。

黒澤：今日一日だけいきなり参加させて頂きました。報道では死者の数字が報じられていますが、現場に来てそれはあまり意味のない事だと感じました。目をそらしたい、けれど見なければいけない自分が居ました。これを体験した方ははるかにつらい事であろうと思っております。それを想像すると自分の中でそれを力に変えることができればいいなと思っております。また福島の方はみなさんいい人だったです。今朝青少年会館の場所が判りにくくて、道行く人に尋ねたら地図まで書いてくれました。ありがとうございました。

坂手：橋本さんに誘われ、お願いしこのツアーに参加させて頂いた。浪江町のようにまだほとんど片付いていない所に行けたことは幸運でありました。また参加させて頂きたいと思います。

小川：福島のご飯が美味しかった。学生の頃を思い出した。災害に何の支度が必要か多くの人に福島を伝えたいと思います。

成清：この旅では人の話を聞く、自分の目で見て感じるという事を主眼にやって来ました。特に請戸小学校では衝撃を受けました。3.11 以来時間が止まっていると感じました。自分の感じた事を表現し、共有してくれることを伝える事が出来るかが課題です。本来はいけないことかも知れませんが敷地の外で泥にまみれたCDを拾ってきました。これは卒業式のCDではないかと思えます。もう一度ゆっくり考えてみたいのでどこまでこのCDを再現できるか判らないが再生を試みようと思っております。上手く行けばその時は皆さんに紹介致したいと思えます。

米山：被災地は初めての訪問です。自分が震災関連で動くのは初めてです。体験してみないと判らないのは想像以上だった。復興に向かうエネルギーを感じた。特に請戸小学校ではジャンパーはそのまま放置されていた。震災後の爪痕が残っており、それが今現在と重なり合って（時間を超えているので）頭がごちゃごちゃになっております。自分は横浜で児童保育に携わっており、福島原発に行く子供に悪い影響があるのでは考える保護者もいるかもしれないと思いながら、見るべきものをちゃんと見なければと自分に出来る範囲で何かの形で今回のことを伝えて行きたいと思っております。

與川：浪江町の瓦礫に今一つ現実味を感じなかった。それは何故だろうと思った。それはそこには匂いが無い事に気が付いた。潮の香りが無い。時間の経過はにおいを消しそれが無いとい

う事なのかと思った。

福島を訪問するのは始めてであるが、同じ被災地の石巻には数度訪問した。石巻の人は元気で明るい。けれど福島の人には原発を抱えているせいか今一つ元気がない気がした。福島と一般の被災地とは大変違う。地震、津波には耐える事ができるが、進行している原発には思いは複雑である。

条井：余り深く考えていなかった。これまで現地を見る機会が無かった。請戸小学校では時計の針が止まったままで、展望台に上ってみると海が眼前に開けて見えた。海はきれいであった。地震、津波は自然災害だからうらむことはないが、原発はうらんでいる。それにしても（小学校の無残な姿に比べ）海と空の美しさは残酷ですらあると感じた。

赤井。素晴らしい企画でした。青木農園の親子のお話、自分の居る所で精いっぱい頑張っている姿に元気をもらった。また渡辺副町長さんのお話が大変熱のこもった情熱的であったのに感動した。

開田：3年前を思い出した。それ以来ずっとひっかかっていた言葉、それは風評被害という事。実際に放射線量があり、福島の人でも地元の野菜を食べない。千葉、茨木のものも警戒した。政府は基準を500ベクレルから100ベクレルに落としたがこれで安心して買えるのか。原発の恐ろしさを改めて感じた。これを一体だれが保障するのか大変な作業だと思った。

藤田：4回目の福島訪問である。今職場で大隈町から避難してきた人と一緒に働いている。原発が見える所まで行った。来年も是非来たいと思っている。

佐藤：3年も経過しているのにまだこんな状況なのかと思った。自治体は一体何をしているのだろうと。これからは今まで以上に關心を持って動かねば忘れられるであろうという危機感を持った。

皆川：この現実をみなさんに伝えてくれと言われたのが印象に残っている。彼らは忘れられるのが一番悲しいのだと感じた。もう3年、まだ3年色々な感じ方がある。

黒木：毎年参加している。菅野さんとは信頼関係も出来た気がする。自分にとって他人事であるのを浪江の現状を見て再度それではいけないと自分に言い聞かせている。ふるさとを離れた人や残った人など価値観が多様化され分断された。福島はまだ子供達を安心して外で遊ばせることの出来るレベルではない。放射線量の基準は年々変わっている。チェルノブイリ事故の影響を受けるドイツは基準が厳しい。渡辺副町長さんの言葉で‘伝えてくれ’とお願いされた。それを我々はどうやって伝えて行けばよいか検討を要すると思っている。

内田：今回は普段立ち入る事の出来ない浪江地区に入る事が出来た事及びその請戸小学校の

惨状に衝撃を受けた事で色々感じる事があった。また自分が感じたのは二つの言葉であった。それは‘弩’と‘戸惑い’である。’弩‘は渡辺副町長さんや自治会長の小澤さんらが原発の処置の仕方について国や東電に対し大変怒っていらっしやった。原発再稼働などもってのほかとの印象である。また’戸惑い‘は青木農園さんのお話である。先代からきゅうり農家を引継ぎハウス栽培しているので、放射線量は殆ど検出していないのに全く売れない時期があった。これは首を吊りたいほどで武骨な青木さんは声を詰まらせて話しておられた。これは怒りと言うより、逃げ場を失った人の最後の悲鳴に聞こえた。’弩‘のうちはまだどこか余裕があり、相手を非難していれば何とか生きて行けるが、それを超え自分の生死にかかわることで’戸惑い‘となった。これは自分自身に突付けられた短刀であるのであろう。どこまで行っても自分事ではなく、他人事で済ますことの出来る自分をそれに重ねて見る事ができ、己の罪を問わずにおれない旅でありました。

以上